

島根県でアオカモメヅル (キョウチクトウ科カモメヅル属) の分布を確認

柳 浦 正 夫*・井 上 雅 仁**

New distribution record on *Vincetoxicum ambiguum* Maxim. (Apocynaceae) from Shimane Prefecture

Masao Yagiura* , Masahito Inoue**

Abstract : The plant of *Vincetoxicum* found in Chikura swamp in Shimane Prefecture was identified as *Vincetoxicum ambiguum*. They grow in the southern parts of Japan and have been designated an endangered species of several prefectures. Chikura swamp is recognized as only habitat in Chugoku region.

Keywords : *Vincetoxicum ambiguum*, Shimane Prefecture

キーワード : アオカモメヅル, 島根県

1. はじめに

今回アオカモメヅルを確認した地倉沼は島根県の西部に位置し(図1),「島根県の地質」(村上,1985)によれば,溶岩の堰き止めによってできたのではないかと推定される海拔422mの高所にある小さな沼で,雨期には水位が上昇して面積を広げ,乾期には水位が大

きく下がりほとんど干上がってしまう特殊な沼とされている。

地倉沼にはチョウジソウなどの貴重な植物が生育していることが知られており,以前から植生調査が行われている(宮本,1963;1972;2002;下田,1980;井上・三島,2019)。しかし,ここに生育するカモメヅル属の植物ははっきりとは同定されていなかった。

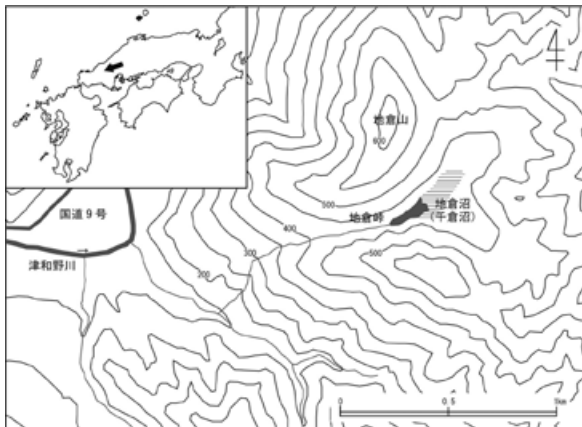


図1 地倉沼の位置



図2 開花個体2025.9.14

* 島根県立立松江北高等学校 〒690-0872 島根県松江市奥谷町 164
Shimane Matsue Kita High School, 164, Okutani-cho, Matsue, Shimane 690-0872, Japan

** 島根県立三瓶自然館, 〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8
The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane 694-0003, Japan

昨年度、地元の有志によって活動している島根植物研究会の研修会で、津和野町大字佐鏡字島から地倉沼を通り、同町大字耕田に下るルートで研修をしようという話になり、2025年9月14日に研修を行った。その際、地倉沼で本種の写真を撮影した。写真を徳島大学の山城考氏に送り同定を依頼した結果、アオカモメヅルであることが判明した。アオカモメヅルは島根県では新記録であるため、その生育状況等について報告を行う。

2. 生育状況と文献での取り扱いの経緯

9月14日は前日から朝方にかけて激しい雨がふっていたので沼は水を湛えていた。地倉沼には昼に着き、ちょうど雨があがったので花が撮影できた(図2、図3)。その写真を送ったところ山城氏がアオカモメヅルと同定されたが、「天気がよければ日中は花を閉じているのですが、曇りだったのですか?」と連絡いただいたように、花が撮影できたのは、運よく時期と天候に恵まれたのであった。その際、同氏から特に貴重なものなので、分布状況を調べ、報告したほうがよいとアドバイスいただき、同年10月1日に再度訪

れることにした(図4)。

以前からアオカモメヅルの生育を確認していた南岸部は、西にある下流への流路付近であり、沼底部に生育するオニナルコスゲ群落の部分には生育しておらず、通常は帯水しないこれより上部のカサスゲやコバギボウシ、エゾミソハギがまばらに見られる場所で見られた(図5)。ここではそれらに巻き付き、つるは短いが個体数は多かった。しかし、オニナルコスゲ群落の境界部や、その上部のチョウジソウ群落やネズミモチ、イヌツゲなどの低木との境界部では個体数は少ないが丈の高い植物体につるは長くなってからまっていた。チョウジソウ群落内部では、個体数は少なかった。ここでは少なくとも150株程度の生育が確認された。南岸部の奥のハンノキ林では生育を確認できなかった。

北岸部では土手の内側の森林下に遊歩道があり、それから下部はチョウジソウ群落、アカメヤナギ群落と続き、沼底部のオニナルコスゲ群落となる(図6)。アカメヤナギ群落では大きく成長して林冠部では密に枝が広がり、林床は暗くなっていたが、その群落の奥側と下部側ではアカメヤナギが点在しているので、明るい部分が見られた。その明るい部分にカサスゲやコバ



図3 花拡大2025.9.14



図5 生育環境(南岸部) 2025.10.1



図4 全景(沼奥部を望む) 2025.10.1



図6 生育環境(北岸部) 2025.10.1

ギボウシ、エゾミソハギが点在して見られ、同様にアオカモメヅルも生育していた（図7，図8）。この北岸部でも大きく2ヶ所のまとまりをもって150株程度の個体数が生育しているものと推定された。

さらに、井上によれば沼のやや奥部に沼を横断する木道があり、ここにも若干生育していたとのことであった。ここは南岸部から渡れるようになっていたが、中央部まではカサスゲやオニナルコスゲの群落でアオカモメヅルは確認できなかった。

以上のように地倉沼でのアオカモメヅルの分布は谷下部の水の抜ける箇所に近い両岸部と沼中ほど北部に生育していることが分った。また、推定300株は生育していると思われる。地倉沼でのアオカモメヅルの生育立地は、被陰されておらず、土壌が湿っていることが必要であり、さらに長期間水につかることもなく、丈の高い植物が密生しない場所という微妙な立地に生育していることが確認できた。

地倉沼のアオカモメヅルについては、地倉沼の植生の遷移を調査した宮本（1963; 1967）にアオカモメヅル *Cynanchum ambiguum* としてすでに記述されていた。しかし、宮本（1972）ではカモメヅル属として *Cynanchum sub lanceolatum* Matsum. var.



図7 生育状況2025.10.1



図8 生育状況2025.10.1

obtusulum Matsum. とのみ記述されているので、コバノカモメヅルとして認識されるようになったものと思われる。さらに宮本(2002)ではコカモメヅルとなっており、それには平成13年（2001年）9月8日の第6回調査として、「第1回目の調査からずっと湿原を構成している常在種」として名前を挙げているのでアオカモメヅルをそれと判断しているものと判断できた。このように当初アオカモメヅルとしていたが、あとは異なる種として認識されたようである。

また、下田（1980）においてはチョウジソウ群落の構成種として *Cynanchum sub lanceolatum* が記載されているので、コバノカモメヅルと認識していたようである。また井上・三島（2019）ではカモメヅル属の一種として扱っている。

3. 日本での分布状況

アオカモメヅル *Vincetoxicum ambiguum* Maxim. はキョウチクトウ科カモメヅル属の植物で本州（紀伊半島）・四国・九州に分布することが知られている。つる性で夏緑性、葉は線形から狭披針形と細く、花冠は径1cm程度、帯黄白緑色、花柄が3-5mmと短い（山城，2017）。また、山城氏によると、地倉沼のアオカモメヅルの個体の染色体数はYamashiro et al. (2002)の報告と同様の $2n = 4x = 44$ の4倍体であることが確認されている。

中国地方では他に分布が確認されておらず、山城氏によれば新産地として非常に重要と連絡いただいたものである。また、「日本のレッドデータ検索システム」(<https://jpnrd.com/>)では、環境省のカテゴリーにはないが、四国（愛媛，高知，徳島）では絶滅危惧Ⅰ類、九州では大分，佐賀，鹿児島で絶滅危惧Ⅰ類、宮崎県では絶滅危惧Ⅱ類と絶滅が危惧される種として掲載されている。

4. さ い ご に

アオカモメヅルは島根県内から標本に基づいて報告されるのは今回が初めてであり、四国や九州から離れた貴重な産地であるといえる。地倉沼では生育個体数が比較的多いが、遷移等により他の植物の生育状況が変化すれば個体数が激減してしまう恐れがある。さらに、生育地を発表することにより採取により個体数を減らしてしまう恐れもあるが、チョウジソウとともにとても貴重な植物であることを認識してもらうことで各植物の保全に関してさらに警鐘を鳴らすことができ

たら幸いである。

また、今回の報告の証拠となる標本は島根県立三瓶自然館に収蔵していることを報告する。

(柳浦正夫採集番号16418, 16419 アオカモメヅル 島根県鹿足郡津和野町耕田地倉沼)

謝 辞

今回アオカモメヅルを同定いただき、発表を薦めていただいた徳島大学準教授の山城 考氏、また研修会に同行いただいた柴田一樹氏、澤田達也氏にはこの場を借りてお礼申し上げます。

引用文献

井上雅仁・三島秀夫(2019) 島根県津和野町地倉沼の植生と植物相, 島根県立三瓶自然館研究報告17: 1-15.

NPO 法人 野生生物調査協会・NPO 法人 Envision 環境保全事務所 (2007) 日本のレッドデータ検索システム. <https://jpnrdatabase/taxon/detail/13199/?page=558>. (2026.1.12閲覧)

下田路子(1980) 地倉沼(島根県)の植生とその変遷. 日本生態学会誌 30: 229-238.

宮本 巖(1963) 地倉沼の湿原植生. 高津川総合学術調査研究報告: 64-69. 島根県立益田高等学校.

宮本 巖(1967) 西部石見の高等植物目録. 石見高原 52-54. 益田高等学校.

宮本 巖(1972) 地倉沼の湿原遷移. 島根県立益田高等学校. 69-85.

宮本 巖(2002) 石見の湿原. 郷土石見 61: 48-61.

村上充英(1985) 地倉沼. 島根県地質図説明書編集委員会. 島根県の地質 432.

山城 考(2017) キョウチクトウ科APOCYNACEAE, 大橋広好ら. 改訂新版日本の野生植物 4 アオイ科~キョウチクトウ科. 308-320. 平凡社. 東京.